官能小説家

香川潤の

週刊

Pinkish Cafe

ピンキッシュカフェ

18禁
ではありません

Vol.1
2011年10月19日号

目次

ご挨拶　3
読者メール　5
連載小説「青の時代」（1）　10
電子ブックニュース　22
お知らせ　28

ご挨拶

ながらくお休みをいただいていました。おひさしぶりの方もいらっしゃるでしょうが、初めましての方も多いことでしょう。

こんにちは。官能小説家の香川潤です。

わたしはかつて、たくさんの官能小説を出版していました。雑誌や新聞掲載の短編小説や、書き下ろしの長編小説、そしてまぐまぐを使ったメールマガジンでの連載もおこなっていました。十年ほど前まで大変精力的に活動していました。

まぐまぐでは多くの読者の方と日々交流し、その交流から生まれた小説や手記本もあります。

以前のわたしの作品や活動については、あらためておいおいと紹介させていただきます。また、お休みしていた間のことについても、少しずつ書いていきましょう。

とにかく、またみなさんと作品を通じて、あるいはメールを通じて、暖かく、そしてちょっぴりエロティックな交感ができればと思っています。

ところで、この新生『ピンキッシュカフェ』について説明させてください。
この電子マガジンは、わたし香川潤の「私的週刊誌（プライベート・マガジン）」です。
厳密にそうできるかどうかはわかりませんが、一週間に一回程度のペースで発行していくことをめざしています。あくまで希望です。そうできるといいなあ。きっとできるんじゃないかな。うん、できるといいな。
内容。
読者の方からのメッセージの紹介と私のコメント。
わたしの作品の抜粋紹介。
新作の連載。
わたしからのお知らせ。
こんな感じでしょうか。
その他、ご希望があればどんどんお答えしていきますよ。
なにしろ、わたし香川潤は、日本一女性読者が多くて、読者交流が盛んだった官能小説家ですからね。それが復活です！
どうぞお付き合いください。

（かがわじゅん）

読者のメールコーナー

今回は最初なので、読者の方からのメールはありません。当然ですね。
しかし、以前わたしがいただいた読者の方からのメールで、まだ紹介していなかったものがあります。それをまずは紹介していきたいと思います。
そして当然ながら、皆さんからのメールをお待ちしています。
メールの宛先は「kagawajun@gmail.com」にお願いします。可能なかぎり、わたしが直接、返信しますよ。

◎さきさんからのお便り

初めてお便りします。
いつも楽しく読ませていただいています。
香川先生の小説でひとりHすることもあるんですよ。
ほんとーは誘いたい相手がいるんだけど、こっちから誘ったりしたら相手が引いちゃうかなぁって心配なんです。

私が23で彼は大学の後輩でハタチなんですよー。
先輩後輩のいい関係だからギクシャクしちゃうのはいやだけど、飲み会とかでつぶれて隣でいっしょに寝てたりすると襲いたくなっちゃうんですー！
彼は私がすきってこと知ってるんだけど、何かよい誘い方とかないかなぁ？
男の立場としてはどう思いますか？
なんかいきなり相談メールになってしまってすみません。
これからもピンキッシュカフェ愛読しますので、よろしくお願いしますね。

★香川からの返信
さきさん、はじめまして。メールをありがとう。
わたしの小説でひとりHしてくれてるんですか。うれしいですね。
ひとりHの時は、パソコンの画面を見ながら？　それとも、読んで盛り上がってから、ベッドに移動？
クリ派？　中派？　お道具はつかいますか？
誘いたい相手がいるんですか。うーむ、そこまで思っているのなら、思い切って誘っちゃいましょう。
最初は、
「映画でも行かない？」

でいいじゃありませんか。
飲み会などの機会が多いなら、よくあるけど、
「泊まっていって」
もしくは、
「泊まらせて」
あるいはもっとはっきりと、
「好きなんだけど、あなたはどう？」
とか。おもしろくないか（笑）。
もっとも、誘おうかどうしようか迷っている時期が、一番楽しいんだけどね（笑）。
わたしなんか、そういうドキドキする出会いはもう滅多にないので、うらやましいな。うんとドキドキを満喫してください。

◎れいこさんからのお便り
香川さま
いつも楽しみにしています。
私は子供の頃から性にすごく興味があって早くから自分でHしたりしていました。でもそれがとても悪いことだという気持ちが抜けず悩んだことも。

いろいろあって、今はとても明るくHなオンナになっています。
配信があった日は、じっくり読んで興奮してダーリンとベッドに入ります。
いつもありがとうございます！
今度は体験記にも応募してみますね。

★香川からの返信
れいこさん、ご愛読をありがとうございます。ダーリンといっしょに楽しまれているんですか？　うらやましいですね。理解のあるダーリンでよかったですね。
早くからひとりエッチをしていたということですが、何歳ぐらいからですか？
女性の方には、すごく幼い頃からひとりエッチをしていたという人がいて、びっくりしてしまうことがあります。そしてそのことに罪悪感を持つことも。
恥じらいを持つことは大切ですが、罪悪感はいけませんね。
体験手記、お待ちしてますよ。

◎なここちゃんからのメッセージ
香川さん、こんにちわ☆私は16歳の女の子です（>O<）
最近、私には深刻な悩みがあるんです。それはまだ処女ってことなんです……。

一応、彼氏はいますが誘われても断り続けてぃます。私はエロいので1人エッチもするし、エッチな小説を読むこともします。だけどいざっ!!というときになったら怖くて逃げだしてしまぅんです。そりゃあ彼氏のことは好きなんだけど……なぜかすごい抵抗がぁるんです!!でもこのまま断り続けて、彼氏に嫌われるのも嫌です(*_*)

私はどぅすればょぃでしょうか…??

★香川からの返信

なここちゃんのお悩み、よくわかりますよ。結論からいえば、

「自分の気持ちを大切にしましょう」

怖かったら、準備がまだできていなかったら、断ればいいですよ。そんなことであなたのことを嫌って離れていってしまうような彼なら、最初からあなたのことをそんなに大切に思っていない証拠だと思って、気持ちよく別れてしまえばよろしい。

なにごとも心と身体の準備が必要です。気持ちの準備ができるのを待ってゆっくり進んでいけばいいと思うよ。でも、エッチなことが好きなのは変なことじゃないんだからね~。

連載小説のスタートです。この小説は官能小説であると同時に青春小説でもあります。ひとりの少年がさまざまな女性経験を通して成長していくさまを描いています。そして時代設定は少し昔です。といっても、昭和初期というわけではありませんが。どうぞお付き合いいただきますよう、お願いします。

作者　香川潤

連載小説「青の時代」（1）

香川潤

第一章　初体験

昼間のことを思い出したら、また腹が立ってきた。

それで聖矢は、必要以上に力をこめて、車体をゴシゴシとこすった。

昼メシを食ってから、このアルバイトに来るために、自転車をこいで家を出た。いつものルートを通って、バイパスに出ようとしたら、美紀と藤井達也のやつがいっしょに歩いているのを見かけた。

手こそつないでいなかったけれど、なにやら楽しそうに談笑している。

聖矢はとっさに近くのコンビニの駐車場に自転車を突っこみ、ふたりを目で追った。
ふたりは反対側の歩道をこちらに向かって歩いてくる。
聖矢がいるコンビニの前まで来ると、美紀が、
「バイバイ、またね」
と、手を振りながら藤井に言うのが聞こえた。
「ああ、またな」
藤井が答え、そのまま通りすぎて行ってしまった。
美紀はしばらく藤井の背中を追ったあと、通りに視線を移し、車の流れがとぎれるのを待って、こちら側に渡ってきた。
そして、コンビニの前に立っている聖矢に、ようやく気づいた。
「あら、聖矢くん」
聖矢は怒りをおぼえながら、言った。
「おまえ、フタマタかけてんのか？　おれと付き合うって言ったのは、嘘だったのか」
この春、二年生になったのを機に、聖矢は思いきって加納美紀に交際を申しこんだのだった。
美紀はかわいい子で、海王高校の男子生徒の間ではほとんど一番人気の女生徒だった。だから、当たって砕けろという気持ちで告白したのだ。
そしたら、あっけなく、

「いいよ」
という言葉が返ってきた。
「あたしも美谷くんのこと、好きだったんだ」
信じられないような言葉が返ってきた。
聖矢は有頂天になってしまった。
それなのに、今日のこの仕打ちだ。
藤井達也も聖矢のクラスメートで、聖矢はカート部にのめりこんでいるけれど、藤井のほうは女子に大人気のバスケ部のエースなのだ。身長も一七〇センチにわずかに足りないこちらに対して、藤井ときたら一七八センチもあるらしい。かっこいいのだ。
ひょっとして、美紀のやつ、藤井に乗りかえたのか？　それなら、せめておれに一言あってもいいじゃないか。
美紀は一瞬びっくりした顔をしたが、すぐに言った。
「フタマタなんて、そんなこと、あたし、しないよ。なんで？」
「だって、いま、やけに楽しそうに歩いてたじゃん、ふたりで」
言ってしまってから、聖矢は後悔した。なんだか、急に自分がみっともなく思えてきた。
嫉妬に狂う男……サイテー。かっこ悪い。
「なんでもないよ、藤井くんとは。ひょっとして、疑ってる？」
「そんなことはねーけどさ……話あるから、あとで来いよ」

「なに、話って？」
べつにとくに話のアテなどなかったけれど、そう言ってしまった。
「来たら話す」
「どこに行けばいいの？」
「バイト先。叔父さんのスタンド」
「わかった。行くよ」
それでふたりは別れ、聖矢はアルバイト先である松尾の叔父さんのガソリンスタンドにやってきたのだった。
いまは夏休みで、学校が始まるまでにはまだ二週間ばかりある。
夏休みの最初から、聖矢は部活の合間にガソリンスタンドで働いていた。
母親の弟である松尾の叔父さんは、ガソリンスタンドを経営しているのだ。松尾叔父は、学生時代はバイクレースの選手で、社会人になってからは怪我が原因でカートに転向して、たくさんのレースを走っている。外国でのレースにもいくつか出ている。いまでも、仕事の合間にサーキットに通っている。
聖矢にとってはあこがれの存在なのだ。
聖矢がカートを始めたのも、松尾叔父の影響だ。小学六年のとき、初めてジュニア用のカートに乗せてもらい、夢中になってしまった。以来、いろんなことを教えてもらっている。
高校はもちろん、カート部があるところに進み、カート部に入った。

自分のカートが欲しいと言ったら、叔父さんは「うちでアルバイトしろ」と言ってくれた。夏休みの最初から、部活の合間にガソリンスタンドに来て、まじめに働いている。

今日も美紀と藤井達也のことがあったものの、仕事を始めたらそのことはすぐに念頭から消えてしまった。

いま彼がみがいているのは、客が置いていったＢＭＷだ。自動洗車機を通したあと、水滴を拭き取り、手作業でワックスをかけている。ハードタイプのワックスがけは、どうしても人間の手でやらなければならない。客もそれを望んで、けっこう高い作業代を払ってくれるのだ。

ドアの下のほうを、しゃがみこんでゴシゴシとやっていると、すぐに汗が吹きだし、いまは水をかぶったように汗ぐっしょりになってしまっている。

この車のオーナーは、たしか薬局のチェーン店のオーナーの息子だ。まだ二十代後半くらいなのに、役職についていて、高給をもらっているらしい。

（くそ、おれだって、学校を出たら、こんな車を乗りまわしたいよ）

しかし、聖矢の家は決して裕福ではないし、ましてや父親が会社の社長というわけでもない。いい車がほしければ、自分で稼ぐしかない。

いや、その前に、カートだ。いい車をカッコつけて乗りまわすより、自分のカートを整備して、レースで勝ちたい。あの表彰台に上れたら、どんなに気持ちいいことか……

別に金持ちになれなくてもいいから、コツコツと金をためて自分のカート買って、たくさ

んレースに出たいものだと聖矢は思った。
いつものように空想をめぐらせながら、無心に車体をみがいていると、頭上から声が聞こえた。
「美谷くん」
ハッと見上げると、美紀が立っていた。
「話って、なに？」
こちらを見下ろしている彼女を見て、聖矢は思いがけず、ドキッとした。
かわいいのだ。
美紀は髪が長い。さらさらしたストレートヘアを、背中まで垂らしている。前髪は眉のあたりでまっすぐにそろえている。
日本人形のようだ。
そして、小柄だ。一五四センチしかない身長は、母親に似たせいだという。
聖矢は立ちあがると、額の汗をぬぐった。
「ああ……」
腰のベルトにはさんだタオルを抜き取り、指についたワックスを拭く。
彼はいま、美紀の親友である岸本百合の言葉を思い出していた。彼女はこう言ったのだ。
「ねえ、美谷くん。あんた、もう美紀とはエッチしたの？」
「ば、バカ！　なにを言うんだ、いきなり」

動揺する彼に、百合は苦笑いしながら言ったものだ。

「やっぱりね。意外にウブなんだよね、美谷くんって。でもね、これだけは言っておくよ。美紀はね、待ってるんだからね、美谷くんのことを。いつまでも待たせると、だれかに取られちゃうよ」

「ま、待ってるって……？」

「バカ、自分で考えなさいよ」

そう言って、百合は行ってしまった。その時残した一瞥が、聖矢には忘れられない。さも見下したような顔つき。いかにも自分は大人で、聖矢は子どもだという軽蔑の顔つき。

（なんだよ）

わけがわからずに、その時はただ腹が立っただけの聖矢だったが、あとになって百合の言葉がしつこく付きまといはじめた。

（待ってる？　美紀が？　なにを？）

あの時、百合は、「美紀とはエッチしたの？」と聞いてきたのだ。

岸本百合は美紀とは小学校の時からの親友だ。美紀に比べるとかなり大柄な百合は、美紀よりずっと大人っぽい印象がある。なんでも知っていそうだ。

美紀も彼女にはなんでも打ち明けられると言っていた。だから、聖矢に美紀に交際を申しこんだ時も、翌日にはもう百合に知られていた。

その百合が、「美紀は待ってる」と言っている。

（なにを……？）

聖矢は女の子と付き合うのはこれが初めてだ。なにをどうしていいのやら、さっぱりわからない。

雑誌とか本にはいろいろ書いてあるけれど、活字に書かれていることと実際のこととは雲泥の差だと感じる。

悪友から回ってきたアダルトビデオは、何本か見たことがある。男女がどういうことをするのかは充分に知っているつもりだ。しかし、それを美紀との関係にあてはめようとすると、なぜかためらいが生まれる。

もちろん、オナニーは知っている。アダルトビデオ、雑誌、写真集などを見ながら、数日おきにしている。しないと身体の中に澱がたまって、キレが悪くなるような気がする。頭がぼんやりして、イライラしてくる。だから、オナニーで澱を吐き出す。そうすると、幾分はすっきりする。

しかし、オナニーのあとは必ず、いくらかの罪悪感に襲われてしまう。なぜだろう。

オナニーのとき、美紀のことを思い浮かべることもある。小柄な美紀を裸にして、抱きしめてみる妄想。

キスをしてみる？　それで？

胸をもんでみる？

それはアダルトビデオの知識だ。美紀の胸って、どんなだっけ？　見たことはない。大き

い？　小さい？

見たことはない。しかし、夏服の切れこんだ襟元から、胸元がのぞいたことはある。白いブラジャーに包まれた胸のふくらみが見えた。谷間があって、決してふくらみは小さくなかった。

それを思いだすと、興奮してしまう。しかし、あとは想像もつかない。闇の中だ。

やみくもにオナニーしてみても、あとは罪悪感だけが残ってしまう。とくに、自分でも大事に思っているはずの美紀を、欲情のはけ口のオカズに使ってしまったことに対して、罪悪感を覚える。

神聖……というわけではないが、なんとなくオナニーなどのオカズにしてはならないような気がするのだ。だから、オナニーをする時は、美紀のことではなく、ビデオや写真集などの性的商品を使ってしまう。

（そうだ、オナニーの対象にしようとするから、後ろめたいんだ）

なかば無意識に、聖矢は決意していた。

いま、自分の目の前には、自分の行動を「待ってる」という美紀がいる。

いまは夏休み。スタンドの外には、人影はない。叔父さんや従業員たちは事務所の中にいるようだ。給油中の車もなし。

心臓が爆発しそうだった。

しかし、聖矢は思いきって、言った。

「美紀、おれ、おまえにキスしたい。いいか？」
「え、いま？」
美紀がびっくりした顔になった。黒目がちの大きな目が、さらに大きく見開かれる。
「いや……あ、あとで。バイトが終わってから」
「いつ終わるの？」
事務所の中の壁かけ時計が、この位置からも見える。まだ午後の四時で、バイトが終わる時間までは間がある。今日は六時まで働くことになっていたのだ。
聖矢は決心した。
「ちょっと待って」
美紀をそこに残して、事務所の中に入っていった。
松尾の叔父さんは、事務机に座って、従業員のひとりと雑談をしていた。
「叔父さん、今日、早引けさせてもらえないかな。ちょっと急用ができた」
「そうだな、まあ、今日はそう忙しくもないから、いいけど。ＢＭのワックスがけは？」
「もうすぐ終わる」
「それだけきちんとやっとけよ」
「わかった」
事務所を出て、美紀のところに戻った。
「ちょっと待って。これだけ終わらせるから。バイクのところで待ってて」

聖矢は急いでワックスがけを終わらせると、事務所に戻り、制服を私服に着替えた。スタンドのガレージのすみに、自分の二五〇ＣＣのバイクが置いてある。校則ではバイク禁止なのだ。だから、学校へは乗っていかない。

中学生のときからずっと小遣いをため、お年玉も全部貯金し、高校に入ってからは春休み、夏休み、冬休みのバイトに加え、新聞配達も毎日やって、バイク購入資金にあてた。みんなが持ってるケータイだって、がまんしている。そして、去年の夏休みに免許を取った。

叔父さんは黙認してくれている。

本当は車の免許がほしいのだが、もちろん十八になるまで取れない。

美紀は聖矢のバイクのシートに尻をもたれかけさせて待っていた。

「行こうか」

「いいの？」

「ああ。乗れよ」

美紀の分のヘルメットを渡してやってから、先に自分がバイクにまたがった。

美紀も私服だ。チェックのフレアミニスカートと、上はＴシャツとタンクトップシャツを重ねている。美紀は裾の乱れを気にすることもなく、大胆にタンデムシートにまたがってきた。横座りなどはしない。

これまで何度か、乗ったことはあるのだ。

美紀の両腕がしっかりと腰にまわされてくる。身体が密着する。その身体の感触と、

（これから……）

という思いとで、聖矢の鼓動はふたたびたかまった。さっきからずっとたかまり続けなのだが。

（つづく）

電子ブックニュース

香川潤の短編小説が電子ブック化され、刊行が順次はじまっています。
現在、三作が公開されています。「盗撮人妻市場」「絶頂ＯＬ二重スパイ」「淫謀夫人」の三作で、これらは「盗撮保養所シリーズ」としてまとめてお読みいただくとより楽しんでいただくことができます。
その抜粋をお送りします。

「盗撮人妻市場」より

覗きカメラは、ふたりにとって、いまやなくてはならない存在になっていた。
やり手営業マンの雨宮が、美人妻にひとり寝をさせて麻雀に熱中しているということも、経営者にとっては貴重な情報のひとつだった。
布団に横になったまどかは、湯船の中での行為の続きを始めた。
股間に手をのばし、まさぐり始めたのだ。
浴衣の下には、なにも着けていない。

ほっそりした指が、下腹部の茂みにもぐりこんでいく。
肉の亀裂にそって、指がさらに奥まった部分へとすべりおりていった。
「専務、ボリュームをあげてくれないか」
里見がいい、植村がマイクのボリュームを調節した。隠しカメラだけでなく、高性能の隠しマイクも仕込まれているのだ。
「は……あ……」
声とも息づかいともつかない音が聞こえてきた。半開きになったまどかの口から漏れてきたものだ。
「なんと、まあ……」
里見は生唾を呑みこんだ。
まどかの指先が折り曲げられ、亀裂の奥をまさぐりはじめる。
「ふ……ん、ん……はあ……ん……」
耐えきれないように声が漏れてくる。
「よほど欲求不満なんでしょうかね」
植村がかすれた声でささやいた。
なにもささやき声で話さなくてもいいのだが、ついつい声をひそめてしまうのだ。
「どうだろう。雨宮くんが愛妻の相手をしてやっていないとなると、問題だな。夫婦のトラブルは仕事にも影響を与えかねん」

「それにしても、色っぽいですなあ」
まどかの両足が布団の上で徐々に開いていく。
浴衣からはだけた真っ白な太ももがまばゆかった。

「絶頂OL二重スパイ」

里見社長は、彼女の足元に座りこみ、浴衣の裾から手を入れて、脚をなでさすっている。ふくらはぎから膝のあたりにかけて、感触を楽しむように触っている。
植村もあかねの乳房の感触を楽しんでいた。
何度も円を描くようにもみほぐす。押し返してくるような弾力が、頼もしい。この弾力が豊かな肉を垂れずに持ちあげているのだろう。
やがて掌の中でポチッとした突起の感触が生まれた。
乳首が硬くなってきた。
「感じてるね。ほら、乳首が立ってきた」
植村は指先で豆粒のような突起をつまむと、コリコリとしごいた。
「か、感じてなんか……」
「しかし、かわいらしく勃起してるよ」
「あ、いや……うん……」
あかねの身体がピクンとなった。植村は強く弱く、リズムをつけて、乳首を転がしたり、

乳房をもみほぐしたりを続ける。あかねの身体のピクつく間隔が、だんだん短くなっていった。

「カレはここにキスしたりしないのかね？　乳首を吸われたりするだろう？」

あかねが小さくうなずいた。

「そんなとき、感じるんだろう？　どうされたら一番感じる？」

「言えません……恥ずかしい……」

「舌でコロコロ転がされたりするんだろう？」

「いや！」

植村の言葉に刺激を受けたのか、あかねが大きく身をよじった。

「小林くんは、こういうふうにコロコロされると感じるんだね」

「ああん、あん、あ……ん」

つまんだ乳首を、強めにひねってみた。

「あ、だめ……あんっ」

座ったまま、腰がうねった。

「淫謀夫人」

湯につかっているときから、妙な感じだった。

さほどの量を呑んだ覚えもないのに、身体がやたらカッカとほてるのだ。

和代はそれほどアルコールに弱いほうではない。確かに植村専務にすすめられて立て続けに二、三杯あおったが、酔ってしまうほどの量ではなかった。

それなのに、身体がカッカと熱い。特に、下半身が異常にうずくような感じなのだ。

湯のせいでもなさそうだ。保養所の湯は、ゆったりと長湯できるように、湯温が低めに設定してあるのだ。

一緒に湯につかっている女子社員と言葉を交わしながら、和代はそっと下半身に手をやってみた。

茂みの奥を指でまさぐってみる。

うずきが強まった。

そういえば、このところずっと、夫とは交渉がなかった。かれこれ一か月以上はひとり寝の夜った。

花肉の合わせ目にそって指をもぐらせると、ぬめりの感触があった。明らかに温泉のお湯とは違う、ぬるっとした感触だ。

いやだ、あたしったら……

排卵日が近づくと、まれにそうなることがあった。しかし、いまは生理が終わったばかりで、排卵日まではまだ間がある。

亀井社長さんのせいかしら……

考えられるのは、そのことだけだった。思いがけずほめちぎられ、持ちあげられた。一種

の口説き文句といっていいほどだった。女としてだれかから口説かれたのは、ひさしぶりのことだ。そのことが、彼女の中に興奮を生んでいるのかもしれなかった。

それにしても、うずきは強かった。

指でまさぐると、さらに奥からあふれてくるようだ。ぬめりに助けられ、指先が敏感な肉芽に触れてしまう。

「ん……」

香川潤の電子ブックは　**こちら**　からご購入いただけます。
電子書籍サイト「ブクログのパブー」というシステムを利用しています。
今後、続々と新作刊行予定です。お見逃しなく！

お知らせ

◎香川潤へのメールや手記、小説などをお寄せください。
いただいたメールには必ず香川から返信します。
また、メール、手記、小説は、この週刊「ピンキッシュカフェ」に掲載させていただくことがあります。かならずペンネームを明記してください。
メールの宛先はこちら。kagawajun@gmail.com

◎香川潤のツイッターをフォローしてください。
アカウントは「@PinkishCafe」です。
アクセスはこちら。http://twitter.com/#!/PinkishCafe

かがわ じゅん
香川　潤

かつてフランス書院文庫、マドンナメイト、光文社Ｖコレクション、日本文芸社、コスミックロマン文庫などで数多くの長編、短編を発表し、官能小説界で独特の存在として輝いていたにも関わらず、近年筆を折り、その存在を懸念されていた伝説の作家。
露骨で過激なストーリーや描写ばかり氾濫している官能小説界にあって、独特のソフトでエロティックな筆致が数多くの女性読者を獲得し、女性読者率は 70 パーセントを超えていた。また、女性読者とのネット交流も熱心におこない、さらに作品に厚みを加えていったことで話題になってもいた。
その伝説の官能小説家が、いま、電子ブックでふたたび始動開始！
まずは過去に発表された活字作品群を、電子ブックで復刊していきます。そして近日、驚愕の新作もリリース予定！

官能小説家・香川潤のピンキッシュカフェ

2011 年 10 月 21 日　第 1 刷発行

発行者　　ピンキッシュカフェ

http://pinkishcafe.blogspot.com

本誌に関するお問い合わせは以下のメール宛に
kagawajun@gmail.com
※本誌掲載内容の無断転載・複写を禁じます。

©2011, KAGAWA Jun